二三男くんの未来日記

豊島区

〝消滅〟の指摘バネに持続発展都市へ果敢に挑戦

まち全体が舞台の誰もが主役になれる劇場都市へ

文化にぎわいの拠点

「区役所がない」

二三男くんは池袋で驚きました。豊島区役所があったはずの場所に来たのですが、庁舎はなくて、ビルの工事が行われています。通りかかった人に聞いてみると、「区役所なら移転したよ」と言われました。

かつてここには豊島区の庁舎と公会堂がありました。豊島区はその跡地を定期借地方式により民間活用。定期借地権の一括前払い地代191億円の一部を新庁舎整備費用の財源に充当するとともに、1300席の新ホールと民間施設（オフィス、にぎわい施設等）で、国際アート・カルチャー都市の顔となる文化にぎわい拠点、新たなランドマークを創出します。

Hareza 池袋の完成予想図

民間事業者は、庁舎跡地にオフィス棟を、公会堂跡地に新ホール棟を整備。新ホール棟に整備されるホール部分は、完成後、区が買い取ります。

庁舎跡地エリアの愛称は「Hareza池袋」。2020年夏にグランドオープンします。

この拠点整備は、豊島区にとって大きな意味があります。二三男くんは豊島区の未来について学ぼうと、区役所の新庁舎へと向かいました。

都心回帰で人口増加

二三男くんは豊島区役所の行政情報コーナーを訪れると、『豊島区人口ビジョン』と『豊島区まち・ひと・しごと創生総合戦略』を手に取りました。

まずは『人口ビジョン』を読みました。

豊島区の総人口の推移を見ると、最も人口が多かったのは1964（昭和39）年の35万3953人です。その後は、人口や経済機能の東京への一極集中が進行し、都心部の地価が急騰する中で、人々が住宅を郊外に求めた結果、都心部の人口は減少し、豊島区でも1997（平成9）年に24万6505人まで落ち込みました。

しかし、バブル崩壊による地価下落等により都心回帰が始まり、豊島区の人口も増加に転じました。

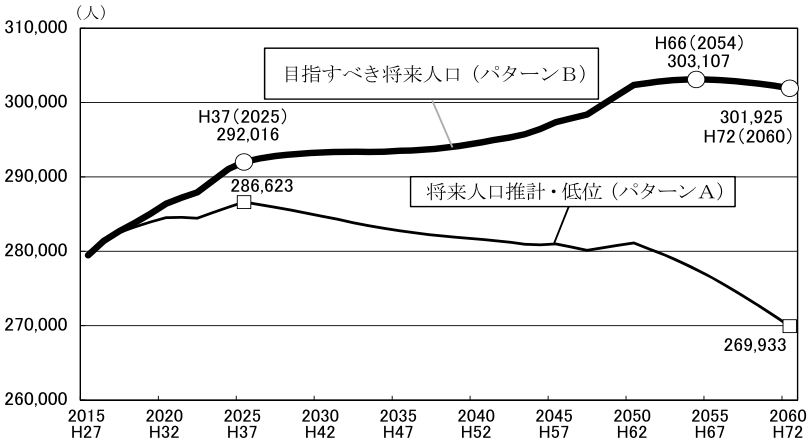
豊島区が「消滅」する？

2014（平成26）年5月8日、

民間有識者組織「日本創成会議」（座長：増田寛也元総務大臣）が国勢調査のデータを用いた独自推計を行い、全国の約半数に当たる896の区市町村を「消滅可能性都市」として発表し、豊島区が23区で唯一、消滅可能性都市とされました。

豊島区の人口動態を見ると、社会動態（転入―転出）がプラス、自然動態（出生―死亡）がマイナスの状況が続いており、転入によって人口増が支えられています。定住率が低く、特に20～30歳代前半の定住率が低くなっています。また、15～29歳の年齢層で転入・転出が活発になっており、その要因として進学や就職に伴う転入、結婚・出産に伴う転出などが推測されます。

■豊島区の将来人口



一方、豊島区の出生数と合計特殊出生率はともに増加傾向が続いており、年少人口が着実に増えていますが、合計特殊出生率は依然として全国的に見ても低い水準です。

また、豊島区の世帯数は増加傾向にありますが、その特徴として単身世帯が多く、その半数を20～30歳代の若年世代が占めています。また、高齢単身世帯数も増加傾向にあり、独居高齢者の見守り等が課題となっています。

消滅可能性都市から持続発展都市へ

豊島区が独自に行った人口推計では、社会移動率はこれまでのように地方からの人口流入が望めないという視点に基づき、人口の流出入が減少する仮定で推計しました。合計特殊出生率が現状の0・99の場合、2025（平成37）年に28万6623人で人口のピークを迎え、減少に転じます。

そこで、人口の将来展望（目指すべき将来人口）に関しては、国を挙げた政策や区独自の施策の展開を加味し、「2030（平成42）年の移動率0・5倍」「合計特殊出生率1・20」に基づき算出しており、この場合の人口のピークは2054（平成66）年の30万3107人です。「消滅可能性都市」から「持続発展都市」への考えのもとで、この将来人口を実現するためのまちづくりを展開していくこととしました。

総合戦略の4つの柱

続いて、二三男くんは『総合戦略』を読み進めました。

「消滅可能性都市」の指摘を受け、豊島区は直ちに対策本部を立ち上げ、この消滅可能性都市の指摘を広く日本全体の問題として捉え、「女性にやさしいまちづくり」「高齢化への対応」「地方との共生」「日本の推進力」の4本の柱を立てて、具体的な対策に取り組んできました。

総合戦略では、人口減少社会をどのように克服していけばいいのか調査・検討を重ね、①子どもと女性にやさしいまち②高齢になっても元気で住み続けられるまち③様々な地域との共生・交流を図り、豊かな生活を実現できるまち④日本の推進力の一翼を担う国際アート・カルチャー都市――の四つの基本目標を掲げました。

子どもと女性にやさしいまち

「子どもと女性にやさしいまち」では、子育て・ファミリー層の定住化を目指し、出産前からの切れ目のない子育てを支援し、女性を応援していくとしています。

具体的な施策としては、保育園待機児童を2年連続でゼロを達成しました。妊婦が妊娠届を提出する際、保育ニーズ調査を行い、必要に応じて追跡調査も実施。潜在需要を含め、保育を必要とする具体的な対象者をほぼ把握し、待機児童ゼロにつなげ

女性のライフプラン形成や若者全体への健康支援に関する情報発信スペース「鬼子母神plus」

ました。また、都と区が連携し、豊島都税事務所には認可保育所を設置しました。

２０１４（平成26）年には出産前からの切れ目ない子育て支援を展開していく「としま鬼子母神プロジェクト」を開始しています。また、２０１５（平成27）年度には、池袋保健所1階に女性のライフプラン形成や若者全体への健康支援に関する情報発信スペース「鬼子母神plus」を開設しました。

高齢になっても元気に住み続けられるまち

「高齢になっても元気で住み続けられるまち」では、高齢になっても、元気で、生きがいを持って、安心して暮らすことができるまちづくりを進めるとしました。

豊島区は２０１８（平成30）年から国家戦略特区を活用して「選択的介護モデル事業」を始めました。これは、介護保険サービスと保険外サービスを明確に区分し、柔軟に組み合わせて提供することで、利用者の利便性やサービスの質の向上、さらには介護事業者のサービス提供効率の向上や介護職員の処遇改善等の効果を目指すものです。

介護が必要となっても、可能な限り自立した生活を送れるように支援する訪問介護サービスに、介護する家族の負担を軽減するサービスなど様々な保険外サービスを組み合わせることで、要介護高齢者や家族の充実した毎日をサポートすることができます。

様々な地域と共生・交流

「様々な地域と共生・交流を図り、豊かな生活を実現できるまち」では、交流を持つ自治体との連携を進め、豊島区と他自治体における相互補完モデルの構築を目指すとしています。連携を図ることで、様々な地域と共生し、ともに豊かな生活を実現できるまちづくりを進めていくこととしています。

代表的な施策は「豊島区・秩父市が進める生涯活躍のまちづくり」です。両区市は姉妹都市で、西武線を使えば約80分で行き来できるアクセスの良さから、豊島区と秩父市の両方を行き来する「二地域居住」の好条件がそろっています。このため、地方居住を考えるワークショップや移住・交流体験ツアー、お試し農体験事業などを実施し、多世代にわたる幅広い層の移住や交流を促進しています。

また、秩父市は、豊島区を始めとした都市部のアクティブシニアを主な対象に、「サービス付き高齢者向け住宅」を地域に開かれた「交流拠点施設」と併せて整備し、入居者が地域に溶け込むことができるよう拠点施設の整備を進めています。

これらの取り組みを通じて、秩父市の定住人口や、豊島区と秩父市の関係人口、自治体間の交流を増やし、お互いが人口を奪い合うのではなく、Win-Win（ウィン・

豊島区民に好評だった秩父市の移住・交流体験ツアー

ウィン）の関係を築こうとしています。

国際アート・カルチャー都市の推進、東アジア文化都市の開催

「日本の推進力の一翼を担う国際アート・カルチャー都市」については、豊島区が誇るアート・カルチャーの魅力を世界に向けて発信し、人と産業をひきつけ、世界中から人が訪れ、楽しむことができる都市づくりを推進し、「持続発展都市」を目指すとしています。

「国際アート・カルチャー都市」とは〝文化の力で日本のリーダーとなるまち〟です。

豊島区ではモンパルナスやトキワ荘などを舞台に、新たな表現文化の源流が生み出されてきました。近年ではマンガやアニメなど、クールジャパンとして世界から注目されるサブカルチャーの拠点が池袋を中心に続々と誕生し、新たな文化の風が吹き始めています。

国際アート・カルチャー都市構想の基本コンセプトは「まち全体が舞台の誰もが主役になれる劇場都市」です。これを実現するため、２０２０年東京オリンピック・パラリンピックまでに池袋駅周辺の四つの公園を整備します。合計約３万平方㍍となる４公園それぞれの特色を活かし、土日祝日には誰もが参加できる多彩なイベントを随時開催。各公園を結ぶ歩行者空間や案内サイン等も充実させ、エリア全体の回遊性を高め、歩いて楽しく、訪れるたびに新たな発見に出会えるまちづくりを展開していきます。また、民間とのコラボレーションを拡大し、清潔なトイレを始め、誰もが安心して利用できる公園施設の管理・運営を進めています。

区民の憩いの場として生まれ変わった南池袋公園

また、豊島区は２０１９（平成31）年の「東アジア文化都市」に決まりました。

この「東アジア文化都市」は、日・中・韓三カ国が、それぞれの文化芸術による発展を目指す自国内の都市を１つ選定し、芸術、伝統、生活に関連する様々な文化イベントを、１年間に渡り開催する国家的なプロジェクトです。また、三カ国が連携して実施する文化による国際交流は、まさに国際アート・カルチャー都市構想と合致するものであり、豊島区の魅力を内外に発信する絶好の機会になります。

持続発展都市を目指す

こうした取り組みにより、豊島区の人口は、２０１８（平成30）年７月５日には、昭和53年以来40年ぶりに29万人を突破しました。

冒頭、二三男くんが訪れたＨａｒｅｚａ池袋は、将来にわたり八つの劇場が圧倒的なにぎわいを生み出す、まさに劇場都市の拠点となります。豊島区が進めるハード・ソフト融合による文化戦略は、まちの知名度を国際的に高め、評価され、選ばれるまちを目指すものです。

二三男くんは、「消滅可能性都市という逆境をバネにして、豊島区が頑張ってきた成果が２０２０年東京オリンピック・パラリンピックを前に徐々に現れてきたこと、豊島区のブランド力が向上し、女性や若い世代が住んでみたいまちへと変わってきたことを感じました。また、ピンチをチャンスに変え、日本をリードする文化都市へと飛躍しようとしている豊島区の取り組みはすばらしい」と感心しました。

一通りの勉強を終えた二三男くん。区の職員に区役所の近くにある南池袋公園は芝生やオシャレなカフェがあると教えてもらい、ワクワクしながら区役所を飛び出しました。

取材協力／豊島区